

放射線災害・医科学研究拠点「県民公開大学」報告

東日本大震災とそれに伴う東京電力福島第一原子力発電事故から約6年が経過し、福島の復興は進みつつあります。他方、未だに県内外に避難されている方も多数おられるなど、解決されていない問題も山積しています。2016年4月に「放射線災害・医科学研究拠点」が設置されたことを踏まえ、過去の放射線被害等からの復興に向けた取組について、専門家による発表及び意見交換を行い、これら知見を福島県民の皆さんと共有することにより、今後の復興の一助とすることを目的に、2017年2月4日、福島市で「県民公開大学」を開催しました。県民の皆様を中心に約150名の参加をいただきました。

この公開大学では、福島県立医科大学・菊地臣一理事長の挨拶（代読：谷川攻一副理事長）、内堀雅雄福島県知事の挨拶（代読：畠利行副知事）の後に、川内村・遠藤雄幸村長とNHK・柳澤秀夫解説主幹をお招きし、特別講演を行っていただきました。引き続き、広島大学・山内雅弥副理事、長崎大学・関根一郎名誉教授、福島県立医科大学・竹之下誠一理事長特別補佐による発表とパネルディスカッションが行われました。概要は以下のとおりです。

1 特別講演

(1) 川内村村長 遠藤雄幸氏

「被災地からの脱却を目指して」と題した講演では、同村が2012年1月31日に帰村宣言を行い、復興に向けた取組として、①除染、②雇用の確保、③住民の健康管理、④教育環境の整備、⑤農林畜産業の再開、⑥インフラの整備、⑦補償・損害賠償等を進めてきた経緯が紹介されました。

そして、復興を目指すためには、①村に住み続ける生きがい・誇りをどう取り戻すか、②賠償・補償は重要ながら、それ以上に生きる意欲や目標を見失わないこと、③村民の間で「戻る」、「戻らない」の対立構図を生み出さないこと、④福島の現状を正しく伝えること等が重要であると締めくくりました。



(2) NHK解説主幹 柳澤秀夫氏

福島県会津若松市出身の柳澤氏は、「オーダーメイドの復興を」と題して講演を行いました。柳澤氏は震災後も度々福島県を訪れ、また、首都圏等に避難した人々への取材を行ってまいりました。

その経験から、①復興の状況と住民が必要とすることにミスマッチが起きていること、②各避難者はそれぞれが多様な状況に直面していることから、帰還する・しないの二者択一を迫るのは難しいこと、③画一的なルールを作って全ての人々に対応することには無理があり、それぞれの人に合わせた「オーダーメイド」の対応が必要であること、及び④当事者の方々の声を聞き、様々なオプションを提示して復興を目指す気を起こしてもらおう対応が必要であると述べました。



2 広島大学、長崎大学、福島県立医科大学による発表

(1) 広島大学 山内雅弥氏

山内氏は、「被災地からの復興・広島」をテーマに、広島における原子爆弾による被害の状況や、医療の現場では医師 298 人中 270 人が被ばくするなど困難な状況にあったこと等について紹介しました。また、自らも被曝しながら多くの被爆者の治療を行った蜂谷道彦 逋信病院長、放射線影響研究所の前身である原爆傷害調査委員会 (ABCC) の設立、中山広実医師による被ばく者健康手帳の考案等、復興に向けた人々の努力について紹介しました。

さらに、鉄道は原爆投下の 2 日後に、市電は 3 日後に運行再開するなど、迅速なインフラの回復が復興につながったこと、また、復興には人々の「心の拠りどころ」が重要であり、その意味で、復興のシンボルとして 1949 年に設立された広島カープは、広島の人々にとって心の拠り所となったこと等が紹介されました。

(2) 長崎大学 関根一郎氏

関根氏は「長崎・原爆からの復興」をテーマに、長崎における原爆の被害 (被害の要因は爆風 50%、高熱 35%、放射線 15%)、長崎の放射線の量は広島の 1.5 倍であったこと、放射性感受性の法則、急性放射線障害、慢性放射線障害、白血病の増加等について紹介しました。また、復興については、3 日後には鉄道が復旧するなど速やかにインフラ整備が行われたこと、長崎市中心街が原爆の影響を受けなかったこと、結果として他の戦災被災地と変わらぬ街づくり (復興) が行われたこと等が述べられました。

(3) 福島県立医科大学 竹之下誠一氏

竹之下氏は「福島県の再生・復興の医療拠点として」をテーマに、福島を振り返りながら復興について紹介しました。磐梯山噴火後の医療救護では赤十字社と福島の医療関係者が献身的に救護したこと、福島は戊辰戦争の激戦地であったことから近代医療が始まったこと、福島県立医科大学の前身である須賀川医学校を卒業した後藤新平は満鉄総裁、東京市長などを歴任し、我が国のリーダー的存在となったこと、後藤が後に設立したハルビン学院の第1期生に約6,000人のユダヤ人の命を救った杉原千畝がいたこと、そして浅川町の吉田富三による「吉田肉腫」の発見は我が国の腫瘍学の発展に著しく貢献したことなどが紹介されました。最後に、2016年春に医大が後援し開催された「フェルメールとレンブラント展」は、風評被害の払拭に貢献すると同時に、福島の復興を印象付けるものであったと述べ、「福島の悲劇を（福島の歴史・先人に学び）福島の奇跡へ」と締め括りました。

3 パネルディスカッション（コーディネーター：谷川攻一氏）

3 大学の発表に引き続いて、パネルディスカッションが行われました。復興の原動力について、広島では若手市長や日本原水爆被害者団体協議会など被ばく者自らの力が原動力となったこと、長崎は広島と異なり爆心地が浦上地区であり、市の中心部が残ったという幸運もありましたが、歴史的に交易都市であったことも復興に寄与したことが述べられました。福島では人を育てる寛容の心があり、復興の原動力となってきたことが指摘されました。

一方、広島では原爆投下時には広島以外からの医師の協力を得たことから、広島が受けた恩を返す意味からも、福島原発事故後に「放射線災害復興を推進するフェニックスリーダー育成プログラム」を開始し、リーダーとなる人材を育成していることが紹介されました。長崎では、爆心地から500メートルの地点にあった長崎医科大学では890名が亡くなったにもかかわらず、長崎市の名誉市民第一号となった永井隆先生が救護班のリーダーとして生き残った人々と共に懸命に医療を行いました。福島原発事故後には福島県立医科大学理事長のリーダーシップの下に、放射線についての豊富な知見を有する長崎大学（山下俊一教授他）、広島大学（神谷研二教授他）が事故発生直後から福島に入って支援を行った



等について説明がありました。

また、復興のための「心の拠り所」については、広島では広島カープ球団が、長崎では外国文化がその役割の一端を担いました。福島では、ユダヤ人ネットワークの理解・支援により「フェルメールと・レンブラント展」が実現し、県民が勇気づけられたことが紹介されました。一般に絵画は放射線に弱いと言われますが、海外の美術館が名画を貸し出してくれたことは、風評被害の払拭にも寄与しました。

谷川氏は、復興に向けて、①復興におけるリーダーの存在、②被災地の早期の自立、③そのための意欲、心の拠り所と誇り（文化、伝統、スポーツ等）となるものが必要であることを再度確認し、今後医療を通じた産業の復興に努め、福島県全体の復興に目に見える形で貢献していきたいと述べて締め括りました。

最後に、閉会の挨拶として、本会の実行委員長である福島県立医科大学の大戸斉・放射線医学県民健康管理センター副センター長より、東日本大震災後、福島の被災者が秩序だった行動をしたことについて世界の人々の感動を呼んだこと、そして福島は偉大な歴史を有しており、これからも福島文明を創って行こうとの力強い言葉がありました。

4. まとめ

東日本大震災・原発事故後、復興に尽力されている特別講演者の講演では、それぞれの住民に寄り添い、住民の意見を聴き、尊重することの重要性、個別の状況に配慮した復興を行うことの必要性についてさらに理解が深まったものと期待しています。

広島大学、長崎大学、福島県立医科大学からの発表及びパネルディスカッションでは、原爆と原発事故で違いはあるものの、復興にとって必要な共通課題について共有しました。

今回の公開講座は、「復興学」の創生にとって貴重な第一歩であると同時に、「先進的かつ融合的な放射線災害・医科学研究の学術基盤の確立と、その成果の国民への還元、国際社会への発信」を目的とする放射線災害・医科学研究拠点を構成する3大学の連携・協力体制の強化につながる良い機会となったものと考えます。